

対話フェーズ用「これまでの読書会の振り返り」

#### 第四章の要点

正統性：「みんなが納得している」こと。「みんなで盛り上がること」。

#### 代議制民主主義と直接民主主義

- 直接民主主義：みんなが集まって直接議論する。  
⇒国の人口が増えると不可能。
- 代議制民主主義：有権者が代表（代議士）を選んで、その代表たちが議論する。

**代議制民主主義の正統性の喪失**：選ばれた代表が、ないし代表を選ぶという行為が、人びとを納得させることができなくなってきたから。

⇒「民主主義の危機」<sup>1</sup> と呼ばれる。

・・・「代表を選ぶ」とはどういうことか？

「代表」＝「われわれの代表」

⇒「われわれの代表」という感覚が持たれているかぎり、代表の決定が正統性と持つ、つまりそれについて人々が納得しうる。

└それにはなによりも「われわれ」というまとまりがしっかりしていることが必要。

・・・しかし「われわれ」を形づくっていた労働組合、地域、国家、会社、家族のまとまりが（ポスト工業化とともに）悪くなってきた。

⇒このことが代議制民主主義の正統性の喪失につながっている。

---

<sup>1</sup> ただしここで「民主主義の危機」と言われているのはあくまで代表制民主主義についてのこと（古代では、あるいはルソーにとっては、民主主義とは直接民主主義のことではなかったが）。

民主主義はもともと古代ではどういうものだったのか？

【現代の民主主義と違う点】

- 直接民主主義（大きな寄り合いのようなもの）
- 神殿の前で行われる
- 議論が盛り上がるのが重要。盛り上がったところで挙手して意志決定。  
└ 「民意」 = 「個別の意見を越えた『神の意志』」が降ってくる。

◎民主主義というもの、正統性というものはそもそも、「みんなが投票すればいい」というほど単純なものではない。それではみんなが納得しない。

◎民主主義にとって重要なのは議論が盛り上がること、「みんなで決めた」という気がしてくること、「みんな」ができてあがること。

「代表（リプレゼンテーション）」 = 目に見えないものを、この世に現れさせること。

- 人間ひとりひとりがそうであるように、政治もまた目に見えないものにつながっていないと成り立たない（231頁）。
  - 伝統主義者や未開社会：この世の出来事は過去や神話に書かれてあることが繰り返し現れたものにすぎない。現在の出来事には、先人の振舞いをまねて対処すればいい、と考える。
  - 近代社会：
    - 国家目標、五ヵ年計画、住宅ローン、学資保険、受験勉強、就職活動等々、「未来」という目に見えないものに頼り、現在の苦しみをがまんする。
- GDPや日経平均株価、世論調査や政党支持率が重視されるようになってきた。  
⇒人々が「自由」になる度合いが強まり、国会の議席配置や首相の選ばれ方に、「民意」が現れなくなってきたと思う人が増えたからではないか？  
(議席配置ももともとは「民意」という目に見えないものをこの世に現す方法だった)

第五章：理性・科学・政治学・経済学がどのように「代議制」の「自由民主主義」に結実していったのか。そして「自由民主主義」の限界とはなにか。

近代の思想を組み合わせると次のようになる。

「人間には合理的に判断する能力がある。人間は利己的だから、利益を極大化するように動く。それでも争いはおこらず、むしろ個々人が利己的に行動すればするほど、社会は豊かになって共存共栄する。人間が追及する利益は数値化でき、それは経済なら貨幣による市場の取引量、政治なら得票数で表せる。だから票を集めた政党が政権につき、多数決で法律や政策が決まる制度を作っておけば、最大多数の最大幸福が実現される。ただし政府はあまり民間に介入しないほうがいいし、少数意見の尊重は必要だ。」（215頁）

- しかしこれは、前提において相いれない思想のパッチワーク。
- また、有産層に支持される自由主義と貧困層に支持される可能性の高い民主主義はもとから両立しにくい。

⇒しかしアメリカでは両者が両立している＝アメリカでは全員が平等（貴族がない）で権力から自由で、全員が政治に参加しつつ権力が小さい、とトクヴィルは考えた

#### 自由民主主義が定着する社会条件（トクヴィルによる）

1. 耕す土地が多いため、競って耕せば格差は大きくならない。そのため各人が平等で自由なままでも権力は小さくて済む。
2. 自治組織としての township —— 全員が平等に入植し、自由意志で参加して一員になった人工的共同体——が身近で、参加意識が非常に強い。
  - a. 直接民主主義的な政治参加が行われている。
  - b. 権力が分権化されている。
  - c. 持ち回りの公務が多い。

⇒参加意識が強く、自発的に「われわれの法と秩序」を守ろうという意識も強い。そのため平等で自由でも権力が小さくて問題ない。

3. 法律家や上院議員が知恵をもっている。

#### 4. 宗教が強く理念的な結びつきも強い。理念のもとに「われわれ」意識が作られる。

しかしこれらが自由民主主義の必要条件だとしたら、これらの条件が成り立たない場合には、自由民主主義もなりたないことになる。

〔当時のアメリカと違ってスタートから格差があり、地域社会に権限がなく、理念的な結びつきもない社会では、要になる人物が「われわれの代表」と思われているあいだしか、擬似的にせよ自由民主主義は成立しない。

あるいはこうも言い換えられる。

代議制の民主主義は人々が「自由」になる度合いが低く、地域共同体や理念、あるいは身分といった「われわれ」意識があるときにしか成立しない。

「六十八年」

- まさにこの「われわれ」意識の存立に疑義が投げかけられたのが「六十八年」の学生叛乱：政治に参加するには「現体制」の一員にならないことがまんならない。
- 「われわれは代表されていない」という声は、女性やセクシャルマイノリティからも上がった。  
「社会構造が変わるなかで、既存の代表制のなかで認められてきた『われわれ』の類型に、あわない人びとが声を出してきた」（330頁）

六十八年以降

社会のポスト工業化——情報技術の発展とともにグローバル化が進み、安定雇用が崩れ（非正規雇用の拡大）、労働組合が組織率を落とし、格差が増大——がすすむと、「自分たちは政党に代表されていない、既存の社会に居場所がないという思いを抱く人が増えてゆき、政治が不安定化していく。」（332頁）

## 第六章：二十世紀思想の振り返り⇒代議制自由民主主義の再活性化

- 二十世紀思想を要約するふたつのスローガン：  
「理性を行使する主体への疑い」「個体論から関係論へ」

### 《二十世紀の科学の流れ》

- 相対性理論：世界を把握できる中心的な視点はない。
- 第一次世界大戦：人間は科学を制御できないし、世界を把握することもできないという感覚が広がる。
- 不確定性原理：観測をしても必ず一定の不確定の領域が発生する。⇒完全に精確な観測は原理的に不可能。

### 《二十世紀思想の流れ》

#### 認識と関係を変えるための思想①——現象学：「個体論から関係論へ」

- 個体論：あらかじめ「私」や「あなた」がある、それが相互作用する、という考え方。
- 関係論：関係のなかで構成されてくる、相手も自分も作り作られてくる、という考え方。
- 構築主義＝現象学的社会学：自分も相手も作り作られてくる（再帰性）ものだから、それがどんなふうに構築されてくるかを考える。

☆関係論的な考えに立つと、問題がどうやって構成されてきたかを調べ、相互の関係と認識を変えることによって、解決をはかる道がみえてくる。

#### 認識と関係を変えるための思想②——物証化と弁証法。

- 物証化：人間と人間の関係（目に見えないもの）が、物と物との関係（目に見えるもの）になって現れてくること  
Ex ) 貨幣：生産関係の物証化  
人間の能力：親の学歴、経済状況（文化資本）——これもまた生産関係のなかで得られたもの——の物証化  
⇒「個人」というものは（生産）関係が物証化したもの。

- 弁証法：関係を変える方法のひとつ。——ヘーゲル、マルクスの弁証法は古代ギリシャの「問答法」<sup>2</sup> に由来。
- 弁証法的展開：対立する個物（「私」と「あなた」）は精神（ヘーゲル）ないし生産関係（マルクス）がこの世に現象している形態であり、その変化の過程。
  - 1) 即時段階＝共同態が矛盾を自覚しておらず、お互いが一心同体だと思っている段階
  - 2) 対自段階＝矛盾に気づき、「私」と「あなた」が対立し始める段階  
⇒この状態から関係が変化せず、対立が固定化した状態になると、いくら働きかけても変わらない相手がよそよそしく見えてくる  
(疎外)
  - 3) 止揚：対立関係を乗り越えて、より高次の段階に変化していくこと。これは元の状態に戻ることはありえない。

☆現象学、物証化、弁証法という二十世紀思想は次のように応用できる：

「『AとBが対立する』という個体論的な発想を、見直す必要があります。『労働者』と『資本家』、『男』と『女』、『私』と『あなた』は、関係が物証化している、事後的に構成されているにすぎません。対立してどちらかが勝つということはないのですから、関係を変えなければなりません。」（367頁）

---

<sup>2</sup> 問答法：相手の議論に内在する矛盾を指摘し、疑問を投げかけて対話する。自分が真理に至っていない、自分が矛盾している、ということを実感する（無知の知）。自分の主張を相手に説得する技術である「雄弁術」とは次の点で異なる。すなわち、自分が無知であることを自覚し、内発的に対話する両者が変化するかどうかという点。

《代議制民主主義の再活性化のために》

アンソニー・ギデンスの「再帰的近代化」

- ✓ すべてが再帰的になる、作り作られる度合いが高まり、安定性をなくしていく近代化のかたち。

- ✓ 「単純な近代化」と対比される。単純な近代化とは、個体論的な合理主義が成り立っていた時代の近代化のこと。主体がある、客体を把握できる、計算して操作できる。票の合計が多数の人を代表にすればいい。そういう考え方で政策ができた時代。

[その前提である「個体」が成り立たなくなり、「こうすればこうなるだろう」という予測も成り立ちにくくなってきたため「単純な近代化」も成り立たなくなった。

[ どうして「個体」が成り立たなくなったのか？

- 経済的側面：ポスト工業化
- 関係の側面：人々が「自由」になって、選択が増大したから。  
⇒関係の両端にいるひとの選択（できることを意識すること）が増えたから。

[ しかし合理的に選択する主体が増えるなら、人々の行動はホモ・エコノミクスのそれに近づき、予想しやすくなるのではないか？

↑これも個体論を前提とした発想。「こちらが何かすれば、相手も影響を受けて変化」する。

- ✓ 「現代の社会で増大しているのは、自由の増大というよりも、こういう『作り作られる』という度合い」（381頁）・・・「自己」「伝統」も作り作られる。・・・「再帰性の増大」

- ✓ カテゴリーの限界に行きあたり、左派も右派も行き詰まる。
  - 左派：農民というもの、労働者階級というもの、若者というもの、女性というもの、それらに依拠した政治が、成り立たなくなってくる。

- 保守派の逆機能：相手に「伝統的な行動」を要求するにもかかわらず自分は「自由」であろうとすることが原因
- 原理主義：伝統を不変のものとみなす右派⇒その弊害：暴力と対話拒否。対話に参加して自分に変化することを拒む人は対話を拒否する。対話を拒否しながら相手を支配しようとする者は暴力に走る。

#### ギデンスの提案：「対話民主制」

- 対話を通しておたがいが変化し、新しい「われわれ」を作る。  
⇒こうして作られた「われわれ」の間に成り立つ信頼を「能動的信頼」とギデンスは呼ぶ。  
└ 能動的信頼：自分が相手に何をできるかを考え、それを実行して得ていく相手の信頼。

#### 著者からのその他の提案

- エンパワーメント——対話可能な「主体」の形成（399頁以降）
- フレキシキュリティ——基本保証：カテゴリーに捉われないで済む（404頁以降）
- 保護、パターナリズムからの脱却（409頁以降）
- 自発的結社の利用（412）

#### 《こうした再活性化をしないとどうなるか》

- バック「ブーメラン効果」：自分には関係ないと思っていたところから、自分に危害がはねかえってくる、というもの。
- 「リスク」：「リスク」は人が働きかければ減らせると同時に、人を行動へと駆り立てる。

#### 《まとめ》

- 「旧来の「われわれ」にもとづいた政治が、人びとが「自由」になるなかで崩れているのであれば、新しい「われわれ」を作るように努力する。公開と対話によって人々の参加をうながし、そのための場を作って決定権を持たせ、エンパワーメントするのが政府や専門家の役割だ。」（422-3頁）